

# 日本語の動詞とその結合価

青山 文啓 (桜美林大学大学院)

## Valency and the Japanese Verbal

Fumihiko Aoyama (Graduate Division, J. F. Oberlin University)

### 要旨

単語はその用法しか記述対象にできない。英語の五文型は構成要素単位で動詞の記述を試みるが、ここでは単語を記述の中心に据え、日本語の動詞を例に取りあげる。動詞は語幹と語尾に分割され、語幹の結合価と、語尾の担う三種の従属関係とは相互に関連し、従属関係は結合価の増減にもかかわる。結合価の記述例として、ペアをなす動詞のうち他動詞/自動詞に焦点をあてる。ヲ格/ガ格に体言 (能格) が共有されるペアに着目すれば、体言が結合価の決定に大きくあずかることが分かる。結合価は(a)用言がいくつ体言を取り、(b)どのような体言が、(c)どのような助詞に仲介されるかを記述する。どの言語も体言は最大のメンバーを誇り、(b)の様な記述はできない。すべての単語が一度は体言であり、固有名詞、外来語、複合名詞、短縮語、略語、メタファーすべてを扱える記述モデルは虹の向こうにある。どのように体言を囲いこむかその対処法について検討する。

### 1. はじめに

まず、結合価を想定しなければ説明できない、傍証をいくつか提示する。つぎに、日本語で単語が音形とアクセント型で外形を定義されるという基本的なことがらを確認する。いうまでもなく、印刷物としての辞書では単語をどのような見出し語形として登録するかを決めない限り、その見出し語に品詞情報さえ振ることはできない。

### 2. 結合価を想定すべきか？

ここでは結合価(文型)を想定しなければ説明のできない問題を二つ取りあげよう。例えば〈ココガイタイ〉と〈ココニイタイ〉とは助詞が異なるだけである。しかし、この助詞の違いをもとに私たちは頭のなかの辞書を引き、結合価を割り出して〈ココ／ガ／イタイ〉〈ココ／ニ／イ／タイ〉のようにべつべつの語形として分割する。また、イタイもイルも助詞ガを取りうるが、助詞ニを取るのはイルだけである。こうして結合価は、二つの文に現れるココの解釈にもおおきな差異を強制する。つまり、最初のココは身体部位だが、二つめの例では話し手の存在する空間を指す。こうした解釈の違いも、イタイとイルの語幹がそれぞれ持つ結合価によるものと考えられる。

当面、ある用言の漢字仮名表記を無視して、音形とアクセント型が活用を通じておなじであれば、同一の単語と考える——例えば「書く」「掻く」「欠く」はおなじ単語の異表記である可能性がある。しかし「欠く」にはペア「欠ける」があり、前二者とは異なる。自他ペアがあるかないかは動詞の用法分類にとっても一つの目安である。

本題にもどろう。結合価を想定すべきべつの例として(1)に昔話「一寸法師」をあげる。

- (1) むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。【Z】子どもがなかったものですから、【Z】子どもがほしくて、ほしくて、明けても暮れても、このことばかり、【Z】神さまにおねがいしておりました。[『日本むかしばなし集 1』坪田譲治 1975]

第一文には「おじいさんとおばあさん(と)」という並列された体言が現れるだけであり、第二文の三カ所のスロット【Z】に入るのはこの体言しかありえない。しかし「おじいさんとおばあさんニ子どもガない」という文型は「子ども」を【実子】と解釈させ、【おじいさんとおばあさんが親ではない】という昔話特有のナンセンスな推論を呼び出す(例えば「公園に子どもがいる」と比較すると分かりやすい)。つまり用言に結合価を想定することは、無数にある体言と、その組み合わせから生まれる際限のない推論を、用言の網のなかに追いこむ有効な方法である。

### 3. 用言から眺めた体言

どの言語でも体言はほかの品詞を圧倒しておおい。これは、無限の単語を有限個の類に収め、品詞表示を与えるだけではすまない問題である。ここでは体言と用言に焦点を絞ることにする。『日本国語大辞典』(初版 1976 年完結)は 44 万語の見出し語総数を誇るが、編集に深くかかわった松井栄一(1979)によれば見出し語を主要品詞別に見れば以下のようなことになるという(以下の要約版から主要品詞だけを抜粋する：『図説日本語』1982)。

| 『日本国語大辞典』 | 見出し語総数      | 438,357 |
|-----------|-------------|---------|
|           | 名詞【73.19%】  | 320,824 |
|           | 動詞【5.72%】   | 25,087  |
|           | 形容詞【1.00%】  | 4,381   |
|           | 形容動詞【1.09%】 | 4,760   |
|           | 副詞【1.25%】   | 5,483   |

つまり、体言(名詞)はドンドン造られるが、体言が造語されるたびにあらたに用言が造られることはない。辞典とよく対比される百科事典には、体言以外に収録される単語はなく、大量に排出された複合名詞の集積場所とも見られる。

一面で、複合名詞の形成は、既存の用言に対応させるための補填手段でもある。例えばコロナが世界に蔓延して、大学の授業も会議もオンラインが一般化した。〈教室〉から複合名詞〈バーチャル教室〉を造り、〈教室〉が〈行く〉を始めとする用言のあいだに築いた資産の一部を有効利用するのだとは考えられないだろうか。〈教室で転ぶ〉ことはありそうだが、〈バーチャル教室で転ぶ〉ことはコミカルな推論しか生まないはずである。

逆方向の例もあげておきたい。〈教室に行く〉とはいえても〈先生に行く〉とはいえず〈先生のところに行く〉という(田窪 1984)。これは用言〈行く〉が人を指す体言〈先生〉に対して、場所と理解されたければ形式名詞〈ところ〉に従属するよう強制する例といえる。類例に〈先生の話を話す／君のことが好きだ〉〈バラのにおいをかぐ〉などがあるが、強制の度合いは用言による。主要部〈ところ〉ではなく、従属部〈先生〉と用言〈行く〉との関係に記述の焦点を絞るほうが、実りある成果が得られそうである(宮島 2005)。

### 4. テキストから単語へ

ところで、辞書を編むまえに見出し語形を確定しなければ、品詞名称は与えられない(水谷 1951, 1952)。(2a)は一語だが(2b)が二語であることは、(2c)とこれらのアクセント型まで比較すれば納得がいくところである。

(2a)【とても】大きな男だった。燃えるような緑の目をしていた。(『TVピープル』村上春樹 1993)

(2b)エスパニャと争い、イタリアを狙うヴァロア朝のフランス王【とても】同様であった。(『略奪の海カリブ』増田義郎 1989)

(2c)先生は気長に治すことが大事ですと笑っているが、彼【とて】治療に自信があるようには見えない。(『マリコ／マリキータ』池澤夏樹 1994)

もう一つ類似した例をあげよう。〈……新興勢力である HIS が大手に価格競争を挑み台頭した〉では〈HIS が 大手に 価格競争ヲ 挑む〉という三つの体言を取る。この場合の〈大手〉を〈大手企業／大手航空会社〉の略と理解し、助詞二が用言〈挑む〉の要求するものであると解釈する学習者は、かなり読める人だろう。しかし〈新型コロナの感染が再拡大してきましたが、大手を振ってマスクを外せる日がやってくるのでしょうか？〉

『東京新聞』朝刊 31JUL2022〉では「おおで」であって先の「お」おて」とはべつの単語である。しかし〈大手を振って中小に入る〉ではテキスト全体を読む必要がある。そうだ。

ついでに助詞二のむずかしさをべつの観点から二つ指摘しておこう。まず奥田(1956)のあげる以下の二例を引用しよう：

(3a) 親切に感謝する

(3b) 親切に世話する

つまり述部〈感謝する〉は必須の体言として〈親切〉を要求するが、〈世話する〉にとって〈親切に〉は副詞としてしか解釈されない。助詞二が体言を必須とするか否かは個々の用言が決める専権事項である。もう一つ、三つの格ヲ、ガ、ニのうち、二におおきな負荷がかかることを見るために架空の箱根駅伝駆から例文をあげよう：

(4a) 東洋が青学に勝つ

(4b) 東洋に青学に勝ってほしい

用言が〈ほしい〉のような助動詞(補助用言)である限り〈東洋に〉を結合価とすることはできず、このままの語順を維持するほかない。この点については後の節でもふれる。

## 5. 自他ペアと“能格”

ここではカケル／カカルのように他動詞／自動詞の順に表示し、/kakéru/と/kakáru/を単純にペアと呼ぶ。しかし、ある動詞が「他動詞」か「自動詞」かは、その動詞がどのような助詞を介して体言を取るかどうかにかかっている、語形の問題とはいえない。このように、動詞を含む用言がどのような助詞を介して、どのような体言をいくつ取るかを記述目標に置く立場、あるいはそのような観点からなされた記述結果を「結合価」と呼ぶ。つまり、自他の区別というのはもっとも初歩的な結合価の区別と見ていいだろう。

具体例があると話が進めやすい。ヲ格にもガ格にも「時間をカケル・時間がカカル」でおなじ体言が立つが、「眼鏡をカケル・？眼鏡がカカル」「？霏をカケル・霏がカカル」のように体言をおなじくしないペアはめずらしくない。体言が共通するものを自他ペアと呼ぶことには問題はない(英語圏では70年代前後に有力な研究者が、共通する体言を“能格”と呼んだが最近ではこの用語法はほとんど顧みられることはない：Halliday 1970)。しかし、共通する体言を欠いたペアにまで、この用語を拡げることは混乱を増すばかりだろう。

さらに、それぞれの動詞をハイフンで語幹と語尾に分離して(3a)(3b)に示す。ハイフンの左側が語幹で、右側が語尾である。二つの語幹が共有する/kak/を語根と呼び、それぞれの語幹から共有部分を抜き去ったあとに‘é/ár’という形態ペアが残る。この組み合わせから他動か自動かが判別できるとされてきた。

(5a) /kaké-ru/

(6a) /sazuké-ru/

(5b) /kakár-u/

(6b) /sazukár-u/

しかし、「子どもをサズケル・子どもをサズカル」は(6a)(6b)に示すように、おなじ形態ペアでありながら両者ともヲ格体言を取る他動詞である。つまり形態情報より結合価のほうが優先順位が高いと考えなければならない。

## 6. 結合価：単文と複文を区別するために

最初に単純な定義から出発しよう。文のうち、一つの用言とそれが要求する一つ以上の体言からなる文を「単文」と呼ぶ。これに対して、二つ以上の用言とそれぞれに従属する一つ以上の体言からなる文を「複文」と呼ぶ(ただしこれらの用言は従属か、並列かの関係

に立つ)。複文では、複数の用言が体言を共有する場合がある。このように考えたとしても、単文と複文のあいだに一線を引くのは、なかなかむずかしい。

そのむずしさは用言が活用することによって由来する。例えば「一体に監察医の鑑定は、死後の時間をなるべく内輪に見がちだということだ」(『黒い手帖』松本清張, 中公文庫 1974)では「見る」の連用形が命題を形成するが、主部の「監察医の鑑定」はこの動詞にも文末に現われる助動詞 $\text{ダ}$ にも従属する。例えば、ある単語が用言であるか否かは結合価と活用という二つの性質によって支えられているが、日本語では活用が用言の結合価を変容させて助詞や助動詞への道を歩ませる。実際、私たちがある文を単文と認定するか、複文と認定するかは結合価によって支えられる命題の数が決め手になっている。問題点をすべてリストするには程遠いが、これまで思いついた単文と複文との境界例を以下にあげる。それぞれ(7)は動詞-助動詞/動詞-動詞(つまり複文), (8)は複合動詞/動詞-動詞, (9)は複合助詞/動詞-動詞, (10)(11)(12)は註釈句/動詞(形容詞)-動詞の境界線上にある例である。

■ 簡単に解説を加える。日本語の文法は動詞と助動詞(補助動詞)の一線をあいまいなままにしてきた。(7a)のクレルが動詞か助動詞かは判別ができない。この場合の〈紙に〉をクレルの直前に移動することはできないからだ。しかし〈私に〉は両様の解釈を許す。(7b)のように〈私の体に〉という解釈と、あくまでも受益者という(7c)の解釈である。クレルは(7c)のように〈私に〉を移動させれば明確に動詞である。

(7a) [彼は[[紙に地図をかいて]くれ]た](『深夜特急 2』沢木耕太郎 1994)

(7b) [彼は[[私に地図をかいて]くれ]た]

(7c) [彼は[私に[地図をかいて]くれ]た]

(7d) [彼は[[紙に地図をかいて]私に]くれ]た。

■ 複合動詞のなかにはそれぞれが目的語を共用する場合がある。当然アクセント型は、べつべつに述部として独立すれば単一語のそれからは変更される。最後の(8d)は同義性から遠く離れてしまう。

(8a) ラスコリニコフは斧で老婆をなぐり殺した。(cf. 長嶋 1976)

(8b) ラスコリニコフは老婆を斧でなぐり殺した。

(8c) ラスコリニコフは斧でなぐり老婆を殺した。

(8d) ラスコリニコフは老婆をなぐり斧で殺した。

■ ニヨッテとニヨルトにはいろいろな漢字の書き分けが考えられるが、動詞は主語を取り得る(9c)(9e)だけである。そのほかは複合助詞で受け身と呼応するのは(9c)だけである。

(9a) 喫茶店によって、コーヒーの味はまちまちだ。(青山 2000)

(9b) 消息筋によって、この情報は伝えられた。

(9c) 【私は】喫茶店によって、トルコで地震が起きたことを知った。

(9d) 消息筋によると、地震は午前一時ごろ起こった。

(9e) 【私が】喫茶店によると、テレビはちょうどそのニュースを報じていた。

■ 註釈句が特異なところは、主部は話し手以外に考えられないのに、明示することができない点だ。

(10a) はっきりいって、ぼくは大学の将来が不安だ。(cf. 杉戸 1983)

(10b) 【彼女に】はっきりいって、自分の誠意を示せよ！

形容詞からつくられる註釈句もおなじく主部は表面には現れない。

(11a) 悪いけど、そろそろ行かなくっちゃ。

(11b) 【天気は】悪いけど、そろそろ行かなくっちゃ。

(12) くどいようだけれど、あたしは全く時間には遅れていなかったのだ。(『星影のステラ』林真理子 1986)

■ つぎの(13)は重要な表現型だが、問題の句〈私を相手に〉が独自の主部を取らないことから、単文内部の問題と捉えるべきである。

(13a) その男は私を相手にして冗談ばかり言っていた。

(13b) その男は私を相手に冗談ばかり言っていた。(cf. 村木 1991, 3部2章; 寺村 1983)

以上、結合価を想定しなければ説明のできない用例を羅列した。先行研究を咀嚼し、改訂の機会があればもう少し読みやすいかたちで提示できればと思う。

## 謝 辞

小論をまとめるにあたり、今回もいろいろなかたにお世話になった。現状は未完成なままでありいちいちお名前をあげるのはもうすこし論述を整理してからにしたい。自己紹介をかね拙論には関係のうすいものもリストした。

## 文献

青山文啓(1983) 詞から辞への結合, 『朝倉日本語新講座 3: 文法と意味I』水谷静夫[編], 朝倉書店

青山文啓(1986) 体言と用言の結ぶ二つの関係: 能格性と対称性, 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』7 (情報処理振興事業協会)

青山文啓(1998) 二重主語構文と辞書, 『言語』27(3): 57-63.

青山文啓(2000) 活用と統語—日本語とスペイン語との比較から, 『日本語と外国語との対照研究VI: 日本語とスペイン語(3)』くろしお出版: 39-66.

青山文啓(2000) 統語論—単語の二重分節を中心として, 『一橋論叢』124(4).

青山文啓(2004a) ことばの研究と辞書に記載される情報, 『桜美林論叢』31: 37-45.

青山文啓(2004b) 日本語の正書法へのささやかな願い, 『日本言語政策学会会報』4.

青山文啓(2013) 二つの四階層モデル—『文型』と『構造』のための読書ノート, 『基本文型の研究』

青山文啓(2014) 林四郎, 『日本語文法事典』大修館書店: 508-509.

青山文啓(2016) ハルキのレトリック, ルービンのツボ, 『ことばと文字』6: pp. 181-193.

青山文啓(2019) 鈴木孝夫とその言語圏, 『ことばと文字』11: pp. 167-174.

青山文啓(2020) 『雪国』冒頭部の翻訳をめぐって—中島文雄『日本語の構造』を機縁として(1987年), 『ことばと文字』13: pp. 197-193.

青山文啓(2020) 日本語とその表記, JALT JSL SIG Newsletter #17, pp. 3-4.

青山文啓(2020) ことばと文字, *Romazi no Nippon* 672: pp. 10-11.

青山文啓(2022) 文字の技術的側面, *Romazi no Nippon* 674: pp. 1-3.

大野晋(1978) 『日本語の文法を考える』岩波書店

奥田靖雄(1956) ことばの組み立て, 『講座日本語I: 民族とことば』大島義夫[編], 大月書店

亀井孝/河野六郎/千野栄一[編](1996) 『言語学大辞典 6: 術語編』三省堂

- ガルニエ, カトリーヌ(1994)『日本語の複文構造』細川英雄/出美河子[訳], ひつじ書房  
 川端善明(1976) 用言, 『岩波講座日本語 6: 文法I』大野晋/柴田武[編], 岩波書店  
 金田一春彦(1950) 国語動詞の一分類, 『言語研究』15; 『日本語動詞のアスペクト』金田一  
 春彦[編], むぎ書房 1976  
 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店  
 情報処理振興事業協会(1990)『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(Basic Adjectives)』同  
 技術センター  
 須賀一好/早津恵美子[編](1995)『動詞の自他』ひつじ書房  
 杉戸清樹(1983) 待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点, 『日本語学』2(7)  
 田窪行則(1984) 現代日本語の「場所」を表す名詞類について, 『日本語・日本文化』12  
 寺村秀夫(1983)「付帯状況」表現の成立の条件—XをYに……する—という表現をめぐって,  
 『日本語学』2(10): 38-46.  
 鳥飼浩司(1993) 自他動詞の認定をめぐる序論, 『言語』22(5): 78-85.  
 中島文雄(1987)『日本語の構造』岩波書店(新書)  
 長嶋善郎(1976)複合動詞の構造, 『日本語講座 4: 日本語の語彙と表現』鈴木孝夫[編]大修館  
 書店, 再収: 須賀/早津[編](1995)  
 仁田義雄(1985b)「書評: 『日本語文法・連語論(資料編)』(言語学研究会[編]を讀ん  
 で)『国語学』140  
 芳賀綏(1962)『日本文法教室』東京堂(復刊 1978, 教育出版)  
 橋本三奈子/青山文啓(1992) 形容詞の三つの用法: 終止, 連体, 連用, 『計量国語学』18  
 林大/宮島達夫/野村雅昭/江川清/中野洋/真田信治/佐竹秀雄[編](1982)『図説日本語』  
 角川書店  
 水谷静夫(1951) 形容動詞辨, 『国語と国文学』28(5); 『日本の言語学 4: 文法II』服部四  
 郎ほか[編]大修館書店 1979.  
 水谷静夫(1952) 形容動詞と謂ふもの, 『國文学 解釈と鑑賞』17(12)  
 水谷静夫[編](1983)『朝倉日本語新講座: 文法と意味 1』朝倉書店  
 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館  
 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国語研報告#43)秀英出版  
 宮島達夫(1996) カテゴリー的多義性, 『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文  
 集』鈴木泰/角田太作[編], ひつじ書房  
 宮島達夫(2005) 連語論の位置づけ『国文学解釈と鑑賞』70(7)  
 村木新次郎/青山文啓/六条範俊/村田賢一(1984) 辞書における格情報の記述, 『情報処  
 理学会自然言語処理研究会資料』46-3 pp. 1-8.  
 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

- Chao, Y. R. (1968) *Language and Symbolic Systems*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Burton-Roberts, N (1986) *Analyzing Sentences: An Introduction to English Syntax*. London: Longman.  
 Halliday, M. A. K. (1970) Language structure and language function. In: *New Horizons in Linguistics*  
 ed. by John Lyons, London: Penguin Books. pp.140-165.  
 Jespersen, O (1924) *The Philosophy of Grammar*. (『文法の原理』安藤貞雄[訳], 三巻, 岩波書  
 店, 2006)  
 Jordan, Eleanor Harz (1963) *Beginning Japanese*. (parts 1 and 2) New Haven, Connecticut: Yale  
 University Press. 【p.197f, p.349f】 *na*-nominal  
 Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.  
 Lyons, J (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. (『理論言語学』國廣哲弥ほか[訳], 大修  
 館書店, 1973)